



ティー・ブレイク

NO. 87

クローンシステム

羊のドリーが出たあたりで、クローン人間の問題が大きく取り沙汰され、映画のテーマなどでも大きく取り上げられたことがあった。ただ、クローン人間云々というのは、今始まった話ではない。過去の権力者達が自分の完全複製を作ろうとしていたという逸話は数多く残っているのであるから、それだけ「高等動物のクローン」というのは、長い間の夢物語であったということになる。

ところが、植物では、クローンというのは日常的に見ることができる身近な存在である。その際たるものは、「挿し木」である。挿し木をすれば、元の木 of 完全な複製体を作ることができる。

植物においても、タネというのは、親木の性質を忠実には伝えない。これは、人間の親子のことを考えてみれば、すぐに理解することができる。例えば、甘柿のタネを蒔いて出るのは渋柿である。甘柿の成木は、渋柿の幹に甘柿の枝を接木しなければ得ることができないのである。

当然のことながら、あるスイカが甘かったからといって、そのタネから生えて来たスイカが必ず甘いという保証は何も無い。であるから、先の甘いスイカと全く同じ「甘いスイカ」というものを作るために、クローン技術が使われる。実際には、先の甘いスイカの組織の一部を使って、人工の種子を作り、それを蒔いて、先の甘いスイカと全く同じ「甘いスイカ」を得るのである。

昔は「途轍もなく酸っぱいイチゴ」というようなものもあったが、近頃はどの果物も甘いというのは、実はこういった事情がある。

ところが、パイナップルのように、場所によって糖度が違うようなものはどうしようもなく、たまに「ハズレ」にあたっては、酸っぱい思いをすることになる。そうして、なるべくハズレにあたらないようにと、見た目に固そうなやつを避けながら食べていると、隣では、今や母となった妹が、一度味見をして甘いものを選んで、幼な子に与えている。

そうして、よくよく思い起こしてみれば、幼い頃に母と一緒に食べたイチゴやミカン、どれも甘かったような気がする。妹も、最近めっきり母に似てきていたためか、争われぬ母の面影がそこに重なる。その面影が心を温かくすると同時に、母に対してはもはや礼すら言うことができぬ現実が胸を刺す。その感覚は、それこそ肌を差す夏の日差しのようにであったが、その強い日差しの中で見た親子の情景は、あたかも、それが生み出す夏の陽炎のように見えたのである。

(正)